

研究時評

重症心身障害児(者)の療育研究における成果と課題

細 淵 富 夫*・大 江 啓 賢**

I. はじめに

重症心身障害児(者)(以下、重症児と略す)の療育研究は、訪問教育や医療的ケア、そして地域ケア等の制度的充実を背景に、近年著しく増加してきている。最近刊行された重症児関係書籍は、医療的ケアや訪問教育を主題とする学術書・啓蒙書を中心に、筆者らの知る限りでは約30冊にのぼっており、教育・医療関係者の重症児療育への関心の高さがうかがえる。

この10年ほどの間に本誌に掲載された重症児あるいは重度重複障害児に関する研究時評は少なくない(石川, 2002; 片桐, 1993; 加藤, 1997; 川住, 1998; 松田, 2002; 徳永, 2000; 吉川, 2000)。これらの研究時評により、重症児療育の主要なテーマに関する研究動向についてはおおむね整理されている。そこで本稿では、一部重複するものの、これまで特に論及されなかった分野・領域の療育研究を中心に、その研究動向を整理し、今後の研究課題を検討する。

II. 「療育」の概念をめぐる議論

障害児教育・医療関係者の間では広く「療育」という用語が用いられているが、近年重症児関係者からこの「療育」概念の再検討を求める声が高まっている。現在この用語は肢体不自由児、知的障害児、自閉症児などの発達障害児に用いられているが、特に頻繁に用いられているのは重症児の領域であろう。周知のように、「療育」という用語は東京大学医学部整形外科教授で、わが国の「肢体不自由児の父」ともいわれている故高木憲次によって初めて提唱されたものである。高木は「療育」の根本理念を次のように述べた。

「療育とは、現代の科学を総動員して不自由な肢体を出来るだけ克服し、それによって幸にも回復したら『肢体の復活能力』そのものを(残存能力でない)出来るだけ有効に活用させ、もって自活の途の立つように育成することである」(田波,

1967)

高木はこのように肢体不自由児の独立自活を目標とした「療育」概念を提唱し、重度の肢体不自由児の「療育」については疑問符をつけていた。高木にとって「療育」とは、知的に障害がなく社会参加が期待できるような肢体不自由児に対し、整形外科的治療と教育・職業指導などを行っていくことであった。つまり、高木の考える「療育」概念はかなり限定されたものであったといえる。

廿楽(1992a, 1992b, 1993)は、時代の変化とニーズの多様化により、この「療育」概念が混迷してきたとし、高木をはじめとして、小池文英、大島一良らの「療育」観を紹介しつつ、現代の重症児療育にふさわしい「療育」概念を提唱した。同様に児玉(1998)も、治療可能か社会参加可能な肢体不自由児を対象とした旧来の「療育」概念では対応が不十分であり、「療育」概念の見直しの必要性を指摘している。

「療育」概念を歴史的に検討したものとしては小川(1993)や桜井(2002)の研究がある。小川(1993)は戦前の「療育」概念の展開過程を検討し、柏倉松蔵と高木憲次の主張を分析したうえで、児童福祉法の制定過程にみられる療育施設の変遷をたどり、「療育」という用語の使われ方を明らかにしている。また桜井(2002)は、近年の医療的ケアの動向をふまえて、医療と教育の連携のあり方を検討するうえで、高木憲次のいう「療育」の概念を再検討すべきだとしている。

確かに、「療育」という用語は今日障害児支援のあらゆる領域で用いられており、一般的には医療と教育の結びついたものがイメージされているが、「療育」にすべての医療を含める場合もあるし、医療を除いた発達支援・生活指導・職業指導などの範囲を意味する場合もある。「療育」は障害児の発達支援の基盤となる用語であり、超重症児のQOLの向上をめざしたかわりも含めて考えるならば、医療や発達支援に限定すべきではないだろう。筆者としては、障害のある子どもたちの「いのちの輝き」の向上に向けた取り組みの総体を「療育」ととらえておきたい。

*埼玉大学教育学部

**国立精神・神経センター武蔵病院

「療育」概念の導入・展開過程についての歴史的検討はまだ研究が始まったばかりであり、「医療と教育の連携」というやや陳腐化してしまった理念の背景にある、「療育」の思想的特質の系譜を歴史的に把握しておくことは、新たな重症児療育の発展に資する大切な作業と思われる。

III. 重症児療育の歴史的 연구

重症児の施設療育が始まって40年あまりが経過し、当時を知る関係者が相次いで物故する中で、初期の関係者の証言や重症児療育の歴史的 연구が近年増加しつつある(細渕, 1999)。最も初期のものとしては植田(1977)による制度史研究、清原・久保・姥(1978)による重症児研究史の総説があるが、1990年ごろから初期の重症児療育を担った医師や指導員等による回顧的論稿が出はじめた。

まず医療関係者のものを挙げると、元厚生省国立療養所課長・大谷藤郎が重症心身障害研究会設立時の状況を小林提樹のエピソードをまじえて紹介している(大谷, 2000)。また、元秋津療育園長・大島一良が重症児問題の歴史的経過と「大島の分類」の由来について記している(大島, 1988, 1991, 1998)。大島は開設されたばかりの都立府中療育センターの副院長として重症児入所受け入れ基準を創案した。この基準表がいわゆる「大島の分類」である(大島, 1998)。「大島の分類」は重症児の概念を一般にもわかりやすく示すものであり、現在療育現場で最も広く用いられている。

施設長・医師として長く重症児療育の指導的立場にある岡田(1997, 1998a, 1998b)は重症児療育の歴史と動向についてまとめている。国立療養所関係では、橋上(1988)や三吉野(2000)が重症児病棟開設時の状況を報告している。また、国立療養所足利病院長を務めた中村(1997)も、入所児の個人チェックリストと主要病因別分類を用いた歴史的・臨床的分析から重症児療育の基本的あり方を論じている。

療育現場の指導員や親の立場からの回想も貴重な歴史的証言だが、近年になり国立療養所重症児病棟で開設当初から直接療育を担ってきた指導員第1期生による30年にわたる療育のまとめが出版された(阿部, 1999)。さらに「重症心身障害児(者)を守る会」会長の北浦雅子も、親の立場から重症児対策の黎明期のエピソードを綴っている(北浦, 2002)。

重症児療育史全般にわたる研究としては、重症児問題の顕在化過程や施設療育、制度化過程、親の運動、そして療育思想・概念に関する研究等が報告されてい

る(平沢, 1989; 細渕, 1999, 2002, 2003; 小川, 1993, 2002; 小笠寺, 1997, 1999, 2000; 高橋, 1988)。

また近年では、小林提樹や糸賀一雄の人物・思想研究も着手されている。小林については、自身による自伝的回想も出版されているが(小林, 1983)、近年その生涯と業績がまとめられた(島田療育センター, 2003)。また、小川(2000, 2001)や岡田(2003)によるすぐれた人物研究がある。糸賀についても、野上(1998)や京極(2001)、三浦(2003)によりその先見の実践的福祉思想と生涯が掘り起こされるとともに、糸賀の代表的著作『この子らを世の光に』(糸賀, 2003)も復刊され、重症児療育を通底する根本思想として再評価されている。

以上のように、近年初期の重症児療育に携わった関係者の回想録の出版および主要人物の研究が精力的に行われている。初期の重症児問題や療育事情に詳しい関係者が年々少なくなり、かつ関係資料も散逸しつつある中で、わが国の重症児療育の思想を歴史的に探求・保存・記録することは、障害者福祉・問題史研究における喫緊の課題となっている。

IV. 重症児の教育実践と授業づくり

重症児の教育実践研究における主要な流れは、特定の事例について個別的なかわりを中心記述し、その経過を心理学的に分析するものである。その分析には、「かわり手による当初の子どもの理解とかかわりの条件」および「子どもの状態や行動の変化」、そしてかわりの中で生じた「かわり手による子どもの理解とかかわりの条件の変化」が含まれる(松田, 2002)。実践過程における「かわりのあり方」も含めて分析する方法論は、特定の指導プログラムを適用してその有効性を検証する、いわば「仮説検証型」のアプローチでなく、事例を通してひとつのモデルを呈示する「仮説生成型」のアプローチとなっているのが特徴である(やまだ, 1997)。事例研究としての教育実践研究が心理学研究として成立するためには、その事例が他の事例を理解するうえでの有効な視点を提供するものでなければならないだろう。つまり、個別事例に徹底的にこだわることによって、個別事例を超えた「範例」もしくは「典型例」へと向かう視点を生み出す作業が重要なのである。こうした作業による重症児の療育実践論の構築を期待したい。この点で、宇佐川(1988, 1998)による豊富な実践事例に基づく「感覚と運動の高次化」に視点を置いた療育方法論、教材・教具論の提起は示唆に富んでいる。

重症心身障害児(者)の療育研究における成果と課題

しかし、上記のような事例の個別指導だけが重症児の教育実践ではない。重症児の教育実践研究におけるもうひとつの流れは、養護学校を中心とした障害の重い子どもたちに対する日々の授業づくりの取り組みである。ここでは、子どもたちの発達・障害・生活に視点を当てて、個々の子どもたちのねらいを明確にした集団の中での個別指導が豊かに展開されている。こうした教育実践の成果として、近年、重症児の授業づくりに関する書籍の出版が相次いでいる(原田・三木, 1989; 三木・原田・河南・白石, 1997; 落合・杉本・橘・松本, 2002; 大久保, 竹沢・三島, 1997; 斉藤, 1999)。

重症児の授業づくりに関する研究としては、渡部(1993, 2004)が重症児における「授業」について教育的考察を行っている。また、湯浅(1999, 2001)は重症児の授業分析における教授学的視点からの分析カテゴリーについて検討し、「教材・教具論」や「教師の指導論」といった分析視点を抽出している。さらに、別府(1997b)は心理学的視点から授業研究の方法論を検討し、「数量的研究と質的研究の両面から分析を加え、教師が自分の実践を対象化できる方法論」を検討する必要があるとしている。

授業場面における反応を探ったものとしては、別府(1997a)が一教師の教授行動と子どもたちの行動とをカテゴリー分析し、その特徴を検討している。同様に、高木・岡本・森屋・阪田・小池(1998)や田中・乾・久米・前川・柳川(2000)が重症児の授業過程における応答・行動カテゴリーと心拍変動との関係から重症児の応答特徴や認知プロセスを検討している。また、前田・小林(2000)は授業場面におけるコミュニケーション構造を明らかにするために、教師発話のスクリプトを語用的側面から分析・評価している。さらに山内(1999)は、訪問教育での個別指導計画に基づく授業実践を報告している。

重症児の教育実践では、かかわり手は子どもの微かな手足の動き、表情・発声・呼吸・体温・筋緊張などの変化を受けとめつつかかわりを展開しており、こうした経過を相互作用分析の手法で検討する試みは、ベテラン教師の「名人芸」とされるかかわりの手法をより具体的かつ普遍的なものにしていくうえで必要なアプローチであり、今後の展開が期待される。

次に、重症児の集団指導が発達に及ぼす効果についての研究も試みられている。姉崎(1998)は訪問教育から施設内での集団指導に移行した事例の発達の变化を指摘し、その要因を分析している。複数の重症児が集団指導の形で授業を受けることがどのような効果を

もつのかという点では、日々安定したパターンで繰り返される授業展開(ルーティンの活動)がもたらす安心感や期待感、授業の場がかもし出す全体状況がもつ情動的高揚感、そしてともに学ぶ仲間意識の高まりなどに有効とされている(宮本・後藤, 2000)。こうした効果は、生理指標により超重症児でも確認されている(高木ら, 1998)。

複数教師による重症児の集団授業では、子どもたちの反応を授業記録としてきちんと記録し、担当教員同士で共有し、次の授業に生かしていかなくてはならない。根市・中川・佐藤・渡辺・安藤(2000)はチーム・ティーチングによる集団授業での記録のわかりやすさに着目し、その構造を検討している。こうした試みは集団授業の展開過程を複数の目で把握し、相互に確認しあうことで教師集団としての指導力量を高め、より普遍的な手法につなげていくうえで重要である。

重症児の療育では、個別指導によって個別的な能力・機能の改善・向上をめざす取り組みとともに、重症児集団の中での相互作用、子どもたちが集団的にかかわりあう中での主体性の確立などの人格的成長等を視野に入れた取り組みも重要であり、そうした実践のさらなる蓄積とともに、その分析手法の開発が今後の課題である。

V. 重症児療育と生理心理学的アプローチ

重症児の療育が始まって以来、さまざまな働きかけに対する反応を行動観察により把握することが困難な事例に対する生理心理学的アプローチの有効性が指摘されてきた。片桐(1993)は、生理心理学的指標で得られた知見の妥当性を、実践過程で点検、検証していくことの重要性を指摘したが、この点に限ってその後の研究の展開について簡単に触れておきたい。

生理学的指標を用いた研究は、コミュニケーションの発達評価として、重症児の刺激に対する応答性(定位性反応の発生・展開過程)の探究から、近年では微笑や笑いといった情動反応と心拍変動から他者の働きかけに対する「期待反応」の分析へと展開してきた(北島・小池・堅田・松野, 1993; 北島・小池・片桐, 1994; 北島・雲井・小池・加藤・鈴木, 2000; 北島・竹形・牧野・小池, 1998; 雲井, 2001; 雲井・小池・竹形・坂井・平塚・井上, 1998)。これまでの研究で、ほぼ1歳レベルまでの発達評価が可能とされているが、近年増加しつつある超重症児の教育的対応と結びつけた検討が今後の課題である。この点に関して、訪問教育の授業における生理学的評価の試みが報告されている(大庭・

惠羅, 2003; 田崎, 2000)。

ところで、療育実践における生理学的指標の活用は必ずしも十分ではないとの指摘がある(大庭・惠羅, 2002)。しかし、そもそも生理学的指標は対象となる重症児の応答が「微弱」なために、行動観察上の判断が難しいケースについて、働きかけを工夫するうえで有効な情報を提供してくれるものであり、必ずしもすべての重症児の発達評価に必要というわけではない。ただ、応答がきわめて微弱な超重症児が増加しつつある中で、働きかけの手がかりとしての生理学的指標は、必要に応じて十分活用しうるだろう。生理学的指標は視・聴覚機能を実践と結びつけて評価したり、期待反応の芽生えを把握したりする中で、実践の手がかりを得るとともに、教育実践の評価を行う際の実証的根拠ともなる(惠羅・島影・大野・設楽・宮島・神谷, 1996)。ここで問題となるのは、こうした生理学的指標を得るには特別な機器と専門的な知識・技術が必要なことである。水野・水田・片桐(1999)や田中ら(2000)は心拍指標の即時活用を試みているが、教育現場の観点からは、心拍反応のような生理学的指標をいつも確認しながら授業や療育を進めることは、現実的ではない(片桐, 1991)。そこで求められるのは、実践的にも利用可能な簡便でポータブルな機器と測定・評価システムの開発であり、そのためには養護学校と研究機関との共同研究による継続的な授業研究のさらなる進展が期待される。

VI. おわりに

重症児の療育研究の歴史は、重症児施設としての組織・運営・療育内容を検討するために島田療育園で行われた、小林提樹らによる厚生省委託研究報告に始まる。以来40年あまりの歴史を経て、高等部訪問教育や通所ケアの制度的充実はめざましいものがある。しかし、「超重症児」や「動く重症児」の療育方法論、授業構成論等については、まだ多くの課題が残されている。ここでは触れられなかったが、重症心身障害児療育の中核を担ってきた国立療養所重症児病棟における療育活動の展開にも注目すべきものがあり、国立療養所総合医学会では毎年多くの療育研究が報告されている。暦年齢の変化に伴う重症児の思春期・青年期の療育課題や在宅療育における通所ケアのあり方等、教育・福祉・医療の分野で重症児の療育研究の課題はその裾野を大きく広げようとしている。

文 献

- 阿部幸泰(1999)重症心身障害児(者)と日々係わって30年—その軌跡と問い—. 自費出版.
- 姉崎 弘(1998)重症児訪問教育における集団指導の効果. 特殊教育学研究, 35(3), 53-60.
- 別府悦子(1997a)重度・重複障害児教育における授業分析の試み. SNE ジャーナル, 2(1), 30-57.
- 別府悦子(1997b)重度・重複障害児の授業研究における心理学的的方法論の検討. 障害者問題研究, 25, 228-242.
- 惠羅修吉・島影幸夫・大野幸子・設楽なつ子・宮島ひろみ・神谷重徳(1996)重症心身障害児の視機能に関する電気生理学的検討. 上越教育大学教育実践センター紀要, 2, 13-19.
- 原田文孝・三木裕和(1989)重症心身障害児の授業のつくり方. あずみの書房.
- 橋上保二(1988)国立療養所重症心身障害病棟の開設時の思い出. 重症心身障害研究会誌, 13(2), 46-54.
- 平沢龍子(1989)重症心身障害児施設の療育体制についての歴史的研究. 東京学芸大学大学院修士論文.
- 細淵富夫(1999)重症心身障害児の療育と教育実践的研究の歴史. 重症心身障害児における定位・探索行動の形成. 風間書房, 23-59.
- 細淵富夫(2002)重症心身障害児の療育史研究(1)—療育施設の成立過程と療育思想—. 埼玉大学紀要教育学部(教育科学III), 51(1), 37-48.
- 細淵富夫(2003)重症心身障害児療育の歴史—重症児施設設立の経緯を中心に—. 障害者問題研究, 31(1), 2-10.
- 石川 丹(2002)重症心身障害児の象徴行動. 特殊教育学研究, 40, 83-88.
- 糸賀一雄(2003)この子らを世の光に. NHK 出版.
- 片桐和雄(1991)重症心身障害児への発達援助—療育者との相互作用の形成をめざして—. 別冊発達, 11, 125-137.
- 片桐和雄(1993)重度重複障害児の発達生理心理学の課題. 特殊教育学研究, 31(3), 57-62.
- 加藤忠雄(1997)訪問教育研究の到達点. 特殊教育学研究, 35(2), 51-55.
- 川住隆一(1998)生命活動の脆弱な重複障害児の健康管理に関する課題と研究動向. 特殊教育学研究, 36(3), 41-49.
- 北島善夫・小池敏英・堅田明義・松野 豊(1993)重症心身障害者における期待反応の特徴. 特殊教育学研究, 30(4), 43-53.

重症心身障害児(者)の療育研究における成果と課題

- 北島善夫・小池敏英・片桐和雄(1994)重症心身障害者における笑い表出に伴う期待の特徴. 教育心理学研究, 42, 77-85.
- 北島善夫・雲井未歎・小池敏英・加藤俊徳・鈴木康之(2000)重症心身障害者における期待心拍反応の分化形成過程の特徴と脳形態所見. 発達障害研究, 22, 185-197.
- 北島善夫・竹形理佳・牧野百里子・小池敏英(1998)重症心身障害者における期待促進に及ぼす介助者の介入効果—心拍指標による検討—. 発達障害研究, 20(1), 62-71.
- 北浦雅子(2002)重症心身障害施策の黎明期を語る. 両親のつどい, 551, 2-11.
- 清原 浩・久保裕男・姥 柁人(1978)重症心身障害児研究の歩みと到達点. 鹿児島大学教育学部研究紀要, 29, 61-79.
- 小林提樹(1983)障害者に愛と医療を捧げて. 来し方の記, 6, 信濃毎日新聞社, 53-120.
- 児玉和夫(1998)脳性麻痺の療育概説. 脳と発達, 30, 197-201.
- 雲井未歎(2001)重症心身障害者におけるS1-S2パラダイムへの援助的介入による心拍期待反応の検討—S1の開始介助に基づく期待反応の発達. 特殊教育学研究, 39(2), 31-40.
- 雲井未歎・小池敏英・竹形理佳・坂井和子・平塚純子・井上優子(1998)重症心身障害者における名前の呼びかけに対する応答特徴—種々の働きかけ条件での心拍反応分析による検討—. 発達障害研究, 19, 294-302.
- 京極高宣(2001)この子らを世の光に—糸賀一雄の思想と生涯. NHK 出版.
- 前田泰弘・小林倫代(2000)重度・重複障害児との授業場面におけるコミュニケーション構造. 国立特殊教育総合研究所研究紀要, 27, 11-21.
- 松田 直(2002)重度・重複障害児に関する教育実践研究の現状と課題. 特殊教育学研究, 40, 341-347.
- 三木裕和・原田文孝・河南 勝・白石正久(1997)重症児の心に迫る授業づくり. かがわ出版.
- 三浦 了(2003)糸賀一雄とその時代—重症心身障害児にかけた情熱とその思想—. 日本重症心身障害学会誌, 28(1), 17-20.
- 宮本 淳・後藤秀爾(2000)重度・重複障害児の集団療育事例から—子どもの内的体験イメージをつくること—. 小児の精神と神経, 40(1), 19-25.
- 三吉野産治(2000)初めて重症心身障害児(者)に出あった頃. 日本重症心身障害学会誌, 25(3), 1.
- 水野友有・水田敏郎・片桐和雄(1999)重症心身障害児への発達援助における心拍指標の即時活用. 日本特殊教育学会第37回大会発表論文集, 221.
- 中村博志(1997)臨床障害児学入門—重症心身障害児を主として—. 相川書房.
- 根市正彦・中川修一・佐藤美紀・渡辺政治・安藤隆男(2000)肢体不自由養護学校の集団授業における記述記録のわかりやすさの検討. 特殊教育学研究, 37(5), 27-34.
- 野上芳彦(1998)糸賀一雄. シリーズ福祉に生きる5. 大空社.
- 大庭重治・恵羅修吉(2002)重度・重複障害児の発達評価に関する文献的展望. 上越教育大学研究紀要, 21, 661-673.
- 大庭重治・恵羅修吉(2003)重度・重複障害児の訪問教育における授業事例と生理学的評価の試み. 上越教育大学障害児教育実践センター紀要, 9, 33-41.
- 落合俊郎・杉本健郎・橋 英弥・松本嘉一(2002)いのちキラキラ重症児教育—百舌鳥養護学校からの発信—. クリエイツかものがわ.
- 小川英彦(1993)「療育」概念の成立に関する研究. 社会福祉研究, 57, 95-102.
- 小川英彦(2000)小林提樹の「療育」思想に関する研究—その1 著作年表の作成—. 岡崎女子短期大学研究紀要, 33, 101-110.
- 小川英彦(2001)小林提樹の「療育」思想に関する研究—その2 特質の研究—. 岡崎女子短期大学研究紀要, 34, 99-109.
- 小川英彦(2002)「療育」概念の成立に関する研究—小林提樹の実践より—. 社会福祉研究, 84, 103-109.
- 大久保哲夫・竹沢 清・三島敏男(1997)障害の重い子どもの教育実践ハンドブック. 労働旬報社.
- 大島一良(1988)重症児問題の歴史的経過. 重症心身障害研究会誌, 13(2), 42-46.
- 大島一良(1991)重症心身障害児対策の誕生. OT ジャーナル, 25, 628-630.
- 大島一良(1998)重症心身障害児分類—大島分類の由来—. 重症心身障害学会誌, 23(1), 14-19.
- 大谷藤郎(2000)重心研究会と小林先生. 日本重症心身障害学会誌, 25(1), 3-6.
- 岡田喜篤(1997)重症児・重複児問題. 日本精神薄弱者福祉連盟(編), 発達障害白書戦後50年史. 日本文化科学社, 318-321.
- 岡田喜篤(1998a)重症心身障害児・者の歴史と最近

- の動向. OT ジャーナル, 32, 43-49.
- 岡田喜篤 (1998b) 重症心身障害児問題の歴史. 江草安彦 (監), 岡田喜篤・末光 茂・鈴木康之 (編), 重症心身障害療育マニュアル. 医歯薬出版社, 2-7.
- 岡田喜篤 (2003) 小林提樹—その業績と思想の今日的意味. 愛はすべてをおおう. 島田療育センター (編), 中央法規, 136-167.
- 小笠寺直樹 (1997) 我が国における重症心身障害児問題の歴史的展開と課題. 東京都立大学大学院社会科学部研究科修士論文.
- 小笠寺直樹 (1999) 「全国重症心身障害児 (者) を守る会」の成立過程. ソーシャルワーク研究, 25(1), 62-68.
- 小笠寺直樹 (2000) 重症心身障害児施設療育の制度化過程—対象としての「重症心身障害児」規定をめぐって. 社会福祉学, 41(1), 151-160.
- 斉藤 昭 (1999) 重度障害の子どもと訪問教育. 桐書院.
- 桜井真帆 (2002) 昭和初期における「療育」概念の普及に関する研究. 茨城大学教育学部障害児教育研究収録, 第 34 集, 24-25.
- 島田療育センター (2003) 愛はすべてをおおう—小林提樹と島田療育園の誕生—. 中央法規.
- 高木 尚・岡本圭子・森屋晶代・阪田あゆみ・小池敏英 (1998) 超重症児における応答の特徴とその表出を促す指導について. 特殊教育学研究, 36(1), 21-27.
- 高橋章二 (1988) わが国における重症心身障害児療育・教育の成立過程に関する研究. 兵庫教育大学大学院修士論文.
- 田中道治・乾 初枝・久米精一・前川千代・柳川千尋 (2000) 重症心身障害児の授業過程の分析—行動カテゴリーと心拍変動との関係に着目して—. 特殊教育学研究, 38(1), 1-12.
- 田波幸男 (1967) 高木憲次一人と業績—. 日本肢体不自由児協会, 252-255.
- 田崎宏明 (2000) やすくから教えてもらったこと—重度の意識障害と診断された子どもの内面と指導内容を探る取り組み—. 斉藤 昭 (編), 今日も輝いて—北の国の訪問教育から—. 共同文化社, 214-239.
- 徳永 豊 (2000) 肢体不自由を伴う重度・重複障害児の前言語的対人交渉に関する研究動向とその課題—実証的研究動向を中心に—. 特殊教育学研究, 38(3), 53-60.
- 甘楽重信 (1992a) 私の重症心身障害児 (者) 観. 重症心身障害研究会誌, 17(2), 2-17.
- 甘楽重信 (1992b) “療育” という言葉のもつ意味—その歴史的考察—. 療育の窓, 80, 3-5.
- 甘楽重信 (1993) “療育” の意味とその概念の変遷. 小児の精神と神経, 33, 195-217.
- 植田牧子 (1977) 重症心身障害児施設の制度化について. ノートルダム清心女子大学紀要, 1(1), 17-21.
- 宇佐川浩 (1988) 感覚の初期発達と療育—目と手の発達指導を中心に—. 全国心身障害児福祉財団.
- 宇佐川浩 (1998) 障害児の発達臨床とその課題—感覚と運動の高次化の視点から—. 学苑社.
- 渡部昭男 (1993) 重症心身障害児の「授業」. 鳥取大学教育学部教育実践研究指導センター研究年報, 2, 91-108.
- 渡部昭男 (2004) 重症児の授業づくり. 兵庫重症心身障害児教育研究集会実行委員会 (編), 重症児教育. クリエイツかもがわ, 18-36.
- やまだようこ (1997) 現場心理学の発想. 新曜社, 161-186.
- 山内康弘 (1999) 重症心身障害児とのコミュニケーション: 表出がきわめて微弱であり, コミュニケーションが最も困難であると考えられる事例に関して. 岐阜大学教育学部教育実践センター年報, 3, 5-17.
- 吉川一義 (2000) 知的障害養護学校における重度重複障害児教育実践の課題. 特殊教育学研究, 38(3), 47-51.
- 湯浅恭正 (1999) 障害児教育における授業論研究の課題と展望 (1)—学習参加を中心に—. 香川大学教育実践研究, 32, 45-55.
- 湯浅恭正 (2001) 重症心身障害児の教育実践と授業分析. 香川大学教育実践総合研究, 3, 125-134.

—2004.2.9 受稿, 2004.6.12 受理—